様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 6 月 22 日現在

機関番号：32413
研究種目：研究活動スタート支援
研究期間：2010～2011
課題番号：22830070

研究課題名（和文）　ドイツ知的障害親の会レーベンスヒルフェの成立史研究：特殊教育制度との親和性

研究課題名（英文）　Research on the Foundation History of the “Lebenshilfe”, German‘Parental’Association for people with mental disability: Forcusing on the Intimacy between “Lebenshilfe” and the Special Educational System

研究代表者
松本　瑞穂（MATSUMOTO MIZUHO）
文京学院大学・人間学部・専任助手
研究者番号：60588010

研究成果の概要（和文）：
本研究は、ドイツ知的障害親の会レーベンスヒルフェの成立史と組織機構変遷を軸として、レーベンスヒルフェと特殊教育制度の関係を総合的に考察することを目的とする。全国レヴェルに視点を置いた分析を通して、レーベンスヒルフェが通説とは異なり、特殊教育制度と親和的であったことが明らかとなった。また、創設地マールブルクの地域史調査を通して、マールブルク大学医学部教授が、レーベンスヒルフェの創設メンバーや理事として活躍するとともに、同大学特殊学校教員養成所の設置に多大なる貢献をしていた事実が明らかとなった。

研究成果の概要（英文）：
The purpose of this study is to examine the relationship between the “Lebenshilfe”, german‘parental’association for people with mental disability and the special education system in Germany, focusing on the founation history of the “Lebenshilfe”.
In the first part, contorary to the common view, it turnes out by analysing on the federal level that the “Lebenshilfe” has haven intimacy with the special education system.
Secondly, through the research on the history of Marburg, in where the “Lebenshilfe” was founded, it made clear that some professors of the medical department of the Marburg university not only worked a lot for “Lebenshilfe” as the members of the founding group or the commissioners, but also contributed to establishing the training institute in Marburg for teachers of special education.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2010 年度	620,000	186,000	806,000
2011 年度	560,000	168,000	728,000
年度			
年度			
年度			
総　計	1180,000	354,000	1,534,000

研究分野：社会福祉
科研費の分科・細目：社会福祉
キーワード：社会福祉史、障害者福祉、特殊教育

１．研究開始当初の背景

通常、親の会は親の手により始められる（Jones 2004 IN: Noll; Trent Jr.(eds.), 花村春樹 1994)。しかしながら、レーベンスヒルフェの状況は少し異なっていると、これまで解されてきた。通説によれば、レーベンスヒルフェは「親ではない、ある一人のオランダ人が、戦後ドイツの難民の子どもたちの生活を目の当たりにし、義憤にかられて組織した親の会」と言われており、親のイニシアチブの存在は指摘されていない。

筆者はこの点に関心を持ち、修士論文では創設者といわれるオランダ人トム・ムッタース（Tom Mutters）の活動史を整理し、レーベンスヒルフェの変遷と照合した（松本 2006[修士論文]）。その結果、ムッタースに関する既存の記述においては共通の空白期が存在することがわかった。どの記述も、ムッタースがオランダからドイツに移住し、赴任先の病院内に知的障害児のためのホームを設立するところまでの説明は比較的丁寧に行っているにもかかわらず、彼がドイツの地でレーベンスヒルフェ創設へと至る具体的な経緯についてはほとんど説明していないのである。

ここから通説への懐疑を抱いた筆者は、2007 年 1 月～3 月、会の創設地とされるマールブルクを訪れ、アーカイヴ調査を実施した。そして、教員や医師、医学部教授、教育学教授、心理学教授といったドイツ人学識者達の多大なイニシアチヴの存在を示す資料を発見した（松本 2008[投稿論文]）。さらに 2008 年 5 月～12 月に再度現地調査を行い、親の会を標榜して立ち上げられたレーベンスヒルフェの創設メンバーが学識者中心であったことを確認した。

上述の作業を通じて、筆者は新たなる懐疑を抱くに至った。即ち、「古く権威主義的な戦後ドイツの特殊教育制度に立ち向かい、一石を投じた親の会」という、一般的理解への懐疑である（s. Mühl [1984]1994, Möckel [1988]2007, Hensle/ Vernooij [1979]2002)。創設メンバー（大半が後に理事となり後年まで影響力を行使し続ける）の大半が学識関係者であったならば、レーベンスヒルフェの活動が、戦後ドイツの特殊学校拡充策や、それに付随して生じた各大学の専門職養成課程整備の動きと全く連動しないということがあり得るのだろうか。一般的に流布し、ドイツの先行研究においても無批判に受容されている、レーベンスヒルフェと特殊教育制度との対立図式は、果たして適切なのか。

ここより以降、筆者は当該研究計画に着手することとなった。

２．研究の目的

本研究は、ドイツ知的障害親の会レーベンスヒルフェの成立史と組織機構変遷を軸として、レーベンスヒルフェと特殊教育制度の関係を総合的に考察することを目的とする。レーベンスヒルフェの調査研究を通して、戦後ドイツの特殊教育制度・特殊教育学の特徴を捉えなおすとともに、学校と施設の狭間に置かれた子どもとその家族のために如何なる取り組みがなされ、それが既存の学校・施設にどのような影響を与えたのか／与えなかったかを、総合的に考察すること。それが本研究の主眼である。

３．研究の方法

現地調査を以下の日程で実施した。場所は両回とも主としてヘッセン州マールブルクで、ベルリンでも数日ずつ実施した。日程とともに、主に実施した内容も簡単に記す。

＜第 1 回＞2011 年 2 月 10 日～3 月 10 日

・マールブルクのレーベンスヒルフェ連邦本部を訪問し、Inge Weckend-Schorge 氏にヒアリングした。1958 年の創設以来、マールブルクを拠点としてきたレーベンスヒルフェであるが、主に財政的な理由からベルリンへの本部移転計画が進められている。今回はその移転の進捗状況について話を聞くとともに、移転に伴い閉鎖されるレーベンスヒルフェ図書館の資料の所在を確認した。

・リートシュタットにてヴィトス・フィリップス病院を訪問し、障害者安楽死問題及びドイツ精神医学の略史について、Prof. Dr. Berger に話を聞いた。（なお、ここは、レーベンスヒルフェ創設者とされるムッタースが創設前夜に難民支援活動をしていた場所であるが、残念ながら、その時期に関する資料は得られなかった。）

・バイエルン州某市にて、A 氏に話を聞いた。氏は 1976 年から 1987 年の間、レーベンスヒルフェの、X 地域支部で働いていた。それまで筆者は、連邦レヴェルの組織機構に焦点を当てて研究を進めてきたが、今回初めて会員へのインタヴューが実現し、貴重な地域レヴェルの知見を得ることができた。

・ベルリン国立図書館にて、戦後ドイツの特殊教育制度変遷に関わる資料を入手した。

＜第 2 回＞2011 年 8 月 16 日～9 月 1 日

・マールブルク大学図書館にて、親の会レーベンスヒルフェの資料及び大学児童精神医学部・精神医学部の史資料調査を行い、多数の大学年史のコピーを入手した。オランダ人トム・ムッタースが創設したとされるレーベンスヒルフェであるが、実際はマールブルク大学の当該学部の教授陣がかなりサポートしていた可能性がある。今回入手した資料は

それを裏付けるものであった。
・元レーベンスヒルフェ-バイエルン州某地域の言語療法士、B 氏にインタヴューを行った。B 氏も A 氏と同じく、早期療育部門で働いていた。シャウプ氏が働いていたのは 2000 年代前半であった。両者の話を総合することで、バイエルン州レーベンスヒルフェの早期療育部門の現代史がより明確になった。

４．研究成果
当該研究の成果を、概ね年度別に分けて以下に示す。

(1)2010 年度――トム・ムッタース主役の創設史への懐疑と特殊教育制度との関係

アーカイヴ（Lebenshilfe Archive, 以下 LA と略記）からは、ムッタースが、具体的に、どのようにレーベンスヒルフェを立ち上げたのかを説明する史資料は発見されなかった。一方、マールブルク大学医学部教授であったミッテルマイアー及びその家族の関与を示す史資料や、同大医学部教授のヴィリンガーとシュトゥッテが創設時、多大なイニシアチヴを取っていたことを示す史資料が多数発見された。
また、「親の会」を標榜して立ち上げられたはずのレーベンスヒルフェの各専門委員会のうち、真っ先に設置されたのは研究者委員会であり、親委員会ができるのは創設から実に 10 年後の 1968 年のことであった。
さらに、理事会や委員会の中心メンバーは、創設初期から 1960 年代末に至るまで、大学教授によって占められていた。そのなかには、各州の特殊学校教員養成課程の長も数名いた。つまり、ノーマライゼーションの担い手として自らを演出しつつ、内実では学校施設を志向し、特殊学校整備・拡充策に連動して理事の内外での発言力が増していくという構図が、1960 年代のレーベンスヒルフェにはあったのである。
ムッタースが構想していた「障害のある子どもとない子どもが一緒に教育を受けること」から離れ、レーベンスヒルフェは特殊学校や保護作業所をはじめとする施設を自ら運営・拡充し、その職員ごと翼下に抱え、結果として特殊教育のセグリゲーション施策を側面から支持していた。
即ち、レーベンスヒルフェはその草創期に、いわゆる当事者組織として専門職主義を批判するための土壌を自ら破綻させかねない構造を内包していたと言える。これは、会員である親の自発性を意図せず抑制し、専門職任せの体質を醸成することにも繋がっていった。表向きのイメージと異なり、レーベンスヒルフェが特殊教育界主導の特殊学校拡充策と内実では親和的であったことは、その人的側面を歴史的に見れば、当然の結果であったと言えよう。
（ただし、当時、知的障害のある子どもの親の願いは切実であった。また、親の間では「子どもの障害に合った学校・施設を作ってほしい」との発想が圧倒的主流であった。通説とは異なり、レーベンスヒルフェは特殊教育界の主導する特殊学校拡充策と親和的に動いていたが、これは必ずしも大学教授を中心とする理事・委員らの独断や暴走ではない。このことは強く付言しておかねばなるまい。）
当事者団体が、大学教授等、学識者の能力を活用することは、ドイツだけに特有の現象ではなく、例えばイギリスの親の会にもあった。大学教授を中心とする理事構成には、組織規模の拡大という面では大きな利点がある。素人の親が手探りで試行錯誤するより、大学教授をはじめとする社会的ステイタスの高い人物らがイニシアチヴを取るほうが、組織の整備・拡充・運営という側面から見ればはるかに効率がよい。そのことは理事たちと一般の親たちの共通認識であったと思われる。
レーベンスヒルフェの、「親の会」を標榜し、ノーマライゼーションの担い手として自らを宣伝しつつ、内実では研究者・専門職中心の組織機構を整備し学校施設を志向していくという性格は、本研究で明らかとなったレーベンスヒルフェと特殊学校教員養成課程関係者との強固な人的連続性を見れば、当然であったと言える。特殊教育界主導のセグリゲーション施策を、レーベンスヒルフェが側面から支持していく構造の素地は、レーベンスヒルフェの草創期に既にできていたのである。
なお、ここまでの成果は博士学位論文で詳しく触れている（松本瑞穂、ドイツ知的障害‘親の会’レーベンスヒルフェの成立史研究、2011 年 3 月、首都大学東京）。

(2)2011 年度――レーベンスヒルフェとマールブルク大学特殊学校教員養成との人的連続性（同大医学部教授を媒介として）

2010 年度の調査では、レーベンスヒルフェと特殊教育施設・学校拡充策が、表向きに流布している対立図式とは異なり、親和的に進んでいたことを指摘した。
その後、創設地マールブルクの地域史を調査した結果、レーベンスヒルフェが、その草創期からマールブルク大学特殊学校教員養成所と、少なくとも人的な面で強固に連続していたことがわかった。その結びつきに、とりわけ場所や人的資源の提供という面で多大なる貢献をしたのが、他ならぬマールブルク大学医学部であったことが明らかになった。以下に詳述する。なお、以下に登場する

下線付きの人物は、レーベンスヒルフェの創設メンバー・理事・委員会メンバーのいずれかに該当し、レーベンスヒルフェと関わりの深い人物である。

第二次世界大戦後の西ドイツの教育現場では、然るべき教材、授業を行なえるような教室、人員その他、何もかもが欠乏していた。終戦直後、ドイツの大半の都市において、学校関係の建物の実に 80%以上が破壊されていたという（Schomburg 1963: S.96)。

とりわけ人員不足の問題は、他の教育領域に比しても極めて深刻であった。ナチ時代には特殊教育の教員養成が全く行なわれなかったため、戦後の特殊学級・特殊学校の第一線にいたのは「年輩で」「女性の」「専門教育を受けていない」者たち（Ellger-Rüttgardt 2008: S.298）であった。

ヘッセン州も例外ではなく、1948 年にフランクフルト／マインで、短期の教員養成課程がヘッセン州常設文部省によって実施された（Strohmeyer 1967: S.34)。これは現職の教員が参加できるような、土曜の夜や休暇を利用して単位を取得する形態の課程であった。1950 年から 1952 年の間には、2 年間の養成課程が実施され、マールブルクからも 2 名の女性教員が参加した。マールブルクの特殊学校、ペスタロッチ学校（Pestarozzischule）はギーセン、マールブルク、コーバッハ 3 地区の授業見学実施校（Hospitationsschule）を担い、見学学生の管理はルツケ（Lüdtke）校長が務めた。

しかしながら、フランクフルト／マインのこの教員養成課程は前進しなかった。特殊学校教員連盟は、「特殊学校の教員養成の最上の形態は、4 セメスター制の大学教員によってしか実現されるべきでない」という見解をとっていたのである。そこでルツケ校長は、マールブルク大学の教授たちに探りを入れ、マールブルク大学が上述の特殊学校教員連盟の見解の促進を支援する用意があるかどうかを打診する。これに応答したのが、ヴィリンガー、シュトゥッテ、デュッカー（Dücker）の 3 名であった。

ヴィリンガーとシュトゥッテは、マールブルク大学における特殊学校教員養成の問題に関する非公開の報告書をまとめ、州の常設文部省に提出した。それを受けての話し合いの末、1954 年にマールブルク大学で特殊学校教員養成所（Sonderschulpädagogisches Institut）が設置されるに至る（ibid. S.34)。初代所長をシャーデが務めた後、後任にはフォン・ブラッケンが招聘された。

これに関して、「フォン・ブラッケンの主たる使命は、同養成所を拡充し、かつマールブルク大学に統合することであった」「特に後者の使命は容易ではなかったが、フォン・ブラッケンにより、1963 年に初めてようやく実現された」と指摘されている（Strohmeyer 1967: S.35)。1954 年に既にマールブルク大学に養成課程が設置されているのに、その後も「大学への統合を目指す」という説明はわかりにくいが、つまりは、特殊で専門的・試験的な試みの養成コースを大学に間借りして実施させてもらうのではなく、大学の組織機構そのものにこの養成所（Institut）を正式に統合するということであろう。実際、マールブルク大学年史を確認しても、1947 年から 1958 年までの巻にはこの養成所に関する記述は出てこない。1958-1967 年の巻に、「特殊学校教員養成所（Institut für Sonderschulpädagogik)」として初めて登場する（Chronik 1958-1963: S.519)。

まとめよう。ナチ、第二次世界大戦を経験した西ドイツでは、特殊学校教員養成のニーズが逼迫していた。ヘッセン州常設文部省は 1948 年、フランクフルト／マインを拠点に教員養成に着手する。1954 年にはマールブルク大学に特殊学校教員養成所が設置され、このとき中心となったのがヴィリンガーとシュトゥッテをはじめとするマールブルク大学医学部教授たちだったのである。また、同養成所の講師陣は、マールブルク大学医学部教授らが多数兼務していた。彼らを媒介として人・物・金、とりわけ人的資源が効率的に調達された。多数の大学医学部教授らの貢献により、レーベンスヒルフェはその初期から連邦扶助法を視野に入れた綿密な会則と体系的な組織機構とを備えることに成功していったのである。

(3)今後の課題

以上が、当該研究の成果である。ここより、新たに以下の疑問が浮上する。医学か／教育学かの腑分けや、ドイツの知的障害教育史の先行研究上、強固に存在する施設史／学校史という腑分けでは、レーベンスヒルフェの草創期の全容は必ずしも捉えきれないのではないか。戦前から戦後にかけての福祉領域の主導権の人的推移に着目し、そこにレーベンスヒルフェがどう位置づくのかを考察すべきではないか。さらに言うならば、このような問題構成の欠如が、ドイツ障害福祉・教育の通史の全容解明を今日に至るまで妨げ、結果として、レーベンスヒルフェに関する通説の歪みを無批判に流布させることの一因にもなったのではないか。

これらについては、若手研究 B（課題番号 24730469、2012 年度～2014 年度予定）で、引き続き調査予定である。

(4)展望

ドイツ知的障害教育・福祉の本格的な戦後史研究は、ドイツにおいてさえ、ほとんど無い。例えば、ここでも何度も言及されているヴィリンガーとシュトゥッテは、ナチ障害者安楽死計画の関係者であったことが後に発覚し、レーベンスヒルフェ内外を巻き込む一大スキャンダルとなる。背後にはドイツ・プロテスタント教会のナチ期の障害者政策への関与があり、その戦後史の全容解明は今日に至るまでなおタブーに近いテーマとされている。これはナチ期から1960年代までの、ドイツ特殊学校教員組織(特に補助学校連盟)と民間福祉団体の全構造にも及ぶ人脈の連続性如何の解明にも繋がるものである。

占領期ドイツ福祉の特殊性、並びにレーベンスヒルフェの創設前後のナチ・スキャンダル克服の過程は、1960年代のレーベンスヒルフェと、特殊教育の黄金期を目指す特殊教育学の大学教員との相互依存とでもいうべき関係強化にも間接的に影響を及ぼしているのではないか。この疑問の一端はこれまでの研究で明らかになっているが、今後、より子細な調査を重ねることにより、タコつぼ的な障害種別に細分化された学校制度、それを正当化する特殊教育学、さらに教育と福祉の分断に繋がる施設拡充策の、20世紀初頭から連綿と続く、ドイツ語圏の障害福祉・教育の特異性が、かなりの程度明らかになるであろう。何よりも、制度間の狭間に置かれた子どもとその家族の当事者ニーズが、いかに歪められ、看過されがちであったのかを、歴史に遡及して、逆照射することが可能になるのではないか。これらはすべて、戦後ドイツ障害福祉・教育の歴史研究では空白になっている箇所である。

今後、こうした疑問点を子細に検証し、それを 1970 年代までのレーベンスヒルフェの活動史に入れ込んでいくならば、ドイツ・ドイツ語圏の歴史叙述に新たな知見が提供できる可能性が高いと考えられる。

＜文献リスト（本成果報告書内で言及したもののみ）＞

〔略記号表記文献〕

Chronik 1941-1947 = Philipps-Universität Marburg/Lahn (Hrsg.)(1954): Chronik der Philipps-Universität Marburg. Abril 1941-15. September 1947. Marburg.

Chronik 1947-1950 = id. (1959): September 1947-15. Oktober 1950.

Chronik 1950-1954 = id. (1961): 1. Abril 1950-15. Oktober 1954.

Chronik 1954-1958 = id. (s.a.): 15. Oktober 1954 bis 14. Oktober 1958.

Chronik 1958-1963 = id. (s.a.): 15. Oktober 1958 bis 14. Oktober 1963.

LA LGPB = Lebenshilfe Archives, Marburg: Lebenshilfe. Gründungsgeschichte, Protokoll, BV-Mitglieder.

〔ドイツ語・英語文献〕

Ellger-Rüttgardt, Sieglind ([1997]2006): Geschichte der sonderpädagogischen Institutionen. IN: Harney, Klaus/ Krüger, Heinz-Hermann (Hrsg.) ([1997]2006): Einführung in die Geschichte von Erziehungswissenschaft und Erziehungswirklichkeit. 3. Aufl. Opladen, Bloomfield Hills: Verlag Barbara Budrich.

Ellger-Rüttgardt, Sieglind (2008): Geschichte der Sonderpädagogik. 1. Aufl. München: Ernst Reinhardt, GmbH & Co KG, Verlag.

Hensle, Ulrich/ Vernooij, Monika, A. ([1979]2002): Einführung in die Arbeit mit behinderten Menschen 1. Psychologische, pädagogische und medizinische Aspekte. 7. korrigierte Aulf. Wiebelsheim: Quelle & Meyer.

Jones, Kathleen W. (2004): Education for Children with Mental Retardation. Parent Activism, Public Policy, and Family Ideology in the 1950s. IN: Noll, Steven/ Trent Jr., James W. (eds.): Mental Retardation in America. New York University Press, pp.322-350.

Möckel, Andreas ([1988]2007): Geschichte der Heilpädagogik. 2. völlig überarbeitete Neuaufl. Stuttgart: Clett Cotta Verlag.

Mühl, Heinz ([1984]1994): Einführung in die Geistigbehindertenpädagogik. 3.Aufl. Stuttgart, Berlin, Köln: W. Kohlhammer.

Schomburg, Eberhard (1963): Die Sonderschulen in der Bundesrepublik Deutschland. Geschichte Entwicklung und gegenwärtiger Stand. 1. Aufl. Berlin-Spandau, Neuwied am Rhein: Hermann Luchterhand Verlag GmbH.

Strohmeyer, Sibylle (1967): Zur Geschichte der Marburger Pestalozzischule (1920-1967). Wissenschaftliche Hausarbeit zur Staatsprüfung für das Lehramt an Sonderschulen. Institut für Sonderschulpädagogik der Philipps-Universität Marburg/ Lahn.

〔日本語文献〕
松本瑞穂（2006）「ドイツ知的障害親の会"Lebenshilfe"の創設と展開――難民／発達障害／オランダ人 Tom Mutters の役割」東京都立大学修士学位論文.
松本瑞穂（2008）「ドイツ知的障害親の会"Lebenshilfe"成立前史――Tom Mutters だけが創設の担い手であったのか」『社会福祉学』48 巻 4 号, pp.92-103.
松本瑞穂（2011）「ドイツ知的障害‘親の会’レーベンスヒルフェの成立史研究」首都大学東京博士学位論文.

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計 1 件）
松本瑞穂、マールブルクの特殊学校教員養成と‘親の会’レーベンスヒルフェの人的連続性――マールブルク大学医学部教授を中心として、文京学院大学人間学部研究紀要、Vol.13、2012、259-275

６．研究組織
(1)研究代表者
松本　瑞穂（MATSUMOTO MIZUHO）
文京学院大学・人間学部・専任助手
研究者番号：60588010

(2)研究分担者
なし

(3)連携研究者
なし